

香川大学1年生の問題行動の実態 —コンプライアンス教育のための実態把握—

大久保 智 生 (教育学部准教授)

西 本 佳 代 (大学教育基盤センター講師)

1. はじめに

本研究の目的は、香川大学1年生の問題行動の実態を明らかにし、その結果をもとにコンプライアンス教育の在り方について考察することにある。

近年、大学は不祥事対策としてコンプライアンス教育を強化しなければならない状況に立たされている。例えば、学生が犯罪などの不祥事を起こしたのなら、大学はメディアを通して謝罪し、不祥事対策を講じ、それを発信しなければならない。抑止のしようがない問題の対策を講じることの是非はともかくとして、その一連の流れが「誠意ある対応」としてみなされていることは間違いないだろう。確かに、大学は公的な機関であるし、特に香川大学のような地方国立大学においては地域に対する説明責任が生じている。また、2008年に中央教育審議会が示した「学士力」の構成要素には「市民としての社会的責任」や「倫理観」が挙げられており、社会が大学に期待する教育の一環としてコンプライアンス教育が位置づけられているといっても過言ではない。加えて、不祥事に関わることのない大多数の在学生の心情を想像すれば、同じ大学から犯罪者を出さないための手段を講じることが大学の役割の一つのようにも思える。

その一方、大学においてこの問題を論じるのであれば、こうした社会的要請がある種のモラルパニックの中で生じているということにも自覚的でなければならないだろう。モラルパニックとは、「社会一般に受容されている文化や規範に挑戦したり、逸脱したりする人々を、社会の秩序や公共の利益を脅かすものとしてやり玉にあげ、冷笑・避難・憎悪・激怒を一斉に浴びせる標的に仕立て上げてしまふヒステリックな大衆心理現象」(盛岡・塩原・本間編、1993、1427頁)のことを指す。罪を犯した学生やその学生が在籍する大学が危険視され、メディアの媒介によって社会不安となる。コンプライアンス教育はその社会不安を解消する「特効薬」として期待を集めるのである。

しかし、簡単には「特効薬」は見つからない。そうなった時、行き場のない思いが罪を犯した者やその者が所属する集団の排斥を引き起こしかねない。ジョックヤングは、1960年代後半以降、欧米社会は「安定的で同質的な包摂型社会から、変動と分断を推し進める排除型社会へ」(11頁)移行したと指摘する。排除型社会では、存在論的不安を背景に他者を悪魔に仕立てあげ、社会問題の責任をなすりつける「他者の悪魔化」がおこなわれる。もちろんこれは欧米の話だが、非正規雇用の拡大や失業者の増加等日本にあてはまることが多く、日本もまた排除型社会だとされる。本研究にひきつけてみると、罪を犯した学生やその学生が在籍する大学が危険視され、その解消のために「特効薬」としてコンプライアンス教育が求められる。しかし、簡単には「特効薬」は見つからず、結果として、危険視される学生や大学は「悪魔」として排除される可能性がある。大学におけるコンプライアンス教

育について論じるのであれば、こうした問題が付随していることを忘れてはならないし、間違っても「他者の悪魔化」を助長する方向に学生たちを導いてはならないだろう。先のストーリーを意識的にずらして、つまり、問題の原因を個人や一部の集団の異常性に見出し、それを排除するのではなく、社会的構造を含めた広い視野で問題の本質を見極めながら、大学ですべきこと、できることを取捨選択する必要がある。こうした問題意識に立ちながら、本研究は、香川大学1年生の問題行動の実態を明らかにする。エビデンスにのっとりた検討を進め、排除型社会に寄与しないコンプライアンス教育の在り方を考える一助としたい。

2. 先行研究の検討

大学生へのコンプライアンス教育の中心は規範意識の醸成による問題行動や犯罪の抑止といっても過言ではない。これまでに大学生の問題行動や規範意識に関する研究は、数多く行われている。主に大学生の規範意識の程度などが検討されているが、多くの研究で現代の大学生の規範意識は高いことが明らかとなっている（例えば、平野・新井・山本・井上、2014、黒澤・井上・平野・山本・新井、2015、山本・井上・新井・平野・黒澤、2013）。こうした大学生の規範意識は加齢に伴い低下することが示されているが、時代による変化よりも加齢による変化のほうが大きいことが実証されている（高橋、2003）。加齢による大学生の規範意識の低下も、一般に考えられているモラルの低下ではなく、心理学的には理論的にも実証的にも発達的变化とみなすことができるのである（藤澤、2013、牧・宮本・湯澤、2010、山岸、2002）。こうした規範意識の低下について議論する前に、大久保（2011）や松原（2014）の指摘からも問題行動と規範意識は分けて考える必要があるといえる。したがって、本研究では、大学生の規範意識ではなく、不祥事となるような大学生の問題行動に焦点を当てることとする。

香川大学と同様に不祥事が続いた山形大学は調査報告書（小倉編、2014）をまとめているが、そこでは規範意識と社会性の未熟さが不祥事の原因であると結論付けられている。ただし、ここでも規範意識として山形大学の調査で測定された罪悪感の数値は全体として高いことが示され、社会的スキルも他の大学と比べて低いわけではないことが示されている。また、調査報告書では、規範意識や社会的スキルなどの要因について検討されているが、学生がどの程度問題行動を経験しているのかとあわせて検討する必要があるといえる。

香川大学では、不祥事対策だけのためではないが、主題A「人生とキャリア」において「市民としての責任感と倫理観」の育成に取り組んでいる。不祥事対策としての効果については、藤本（2015）が受講学生の肯定的な自由記述をあげているが、どのような効果があったのかは定かではない。また、この主題A「人生とキャリア」の効果を検証した研究（植田・藤本、2015）もあるが、統計上ほぼ変化が見られない結果を授業の効果としており、その効果については冷静に判断する必要がある。そもそも主題A「人生とキャリア」の対象となっている大学1年生の現状を踏まえずに、教育を行うのは問題がある。したがって、今回の調査では、コンプライアンス教育を行う際に抑えておくべき香川大学の1年生の問題行動の実態を把握し、問題行動に関連する要因について検討を行う。

調査に当たっては、大学1年生がどのような問題行動を行っているのか、また、大学1年生が香川大学でどのような問題行動を見聞きしているのかを調査する必要があるといえる。さらに、大学1年

生にコンプライアンス教育を行う上で不祥事が起きていることを知っているのか、問題が起きた際の相談先を知っているのかについて調査する必要があるといえる。問題行動と関連する要因としては山形大学の調査（小倉、2014）において規範意識として焦点を当てられた罪悪感、社会的スキル、学校への適応感について、先行研究で対象となっている大学と比較して、香川大学の学生が高いのか、低いのかについて明らかにする必要があるといえる。これを検討することで、マスコミが言うように香川大学だけが異常なのか、他の大学と変わらないのかについて議論することが可能になるといえる。さらに、香川大学の問題行動をする者の特徴を明らかにする必要があるだろう。

以上を踏まえ、本研究では、香川大学の1年生を対象とし、問題行動の実態について検討する。具体的には、まず、香川大学の1年生の問題行動の経験と香川大学での問題行動の見聞について検討する。次に、香川大学の1年生の不祥事および相談先の知識について検討する。そして、香川大学の1年生の罪悪感、社会的スキル、大学環境への適応感が先行研究と異なるのかについて比較検討する。最後に、香川大学1年生の問題行動の経験および見聞が相談先の知識、罪悪感、社会的スキル、大学環境への適応感、授業、部活動・サークル、アルバイト、ボランティアとどのように関連するのかについて検討する。

3. 方法

3-1. 調査協力者と手続き

2015年11月の講義時間を利用して、香川大学の1年生410名（男性188名、女性222名）に対して質問紙調査を実施した。所属学部は、教育学部が92名、法学部が54名、経済学部が106名、工学部が83名、農学部が56名、医学部が19名であった。なお、調査協力者に対して、調査への協力と成績との間に関連がないことや外部に回答結果が漏れないこと、調査協力者の回答結果は研究成果の発表にのみ使用され、回答結果は分析後に破棄されることを伝えることで、倫理面への配慮を行った。

3-2. 質問紙の構成

①問題行動の経験：先行研究（山本・井上・新井・平野・黒澤、2013）やこれまでに香川大学で起きた問題を踏まえ、問題行動の経験14項目を作成した。「大学に入ってからあなたがしたことのある行動についてお尋ねします」という教示の下、回答形式は「したことがない」（0点）から「したことがある」（1点）までの2件法である。

②問題行動の見聞：①の問題行動の経験と同じ項目に対して問題行動の見聞を尋ねた。「大学に入ってからあなたが香川大学で他人がしているのを実際に見たり、聞いたことのある行動についてお尋ねします」という教示の下、回答形式は「香川大学で見たり、聞いたことがない」（0点）から「香川大学で見たり、聞いたことがある」（1点）までの2件法である。

③不祥事の知識：不祥事の知識は「香川大学においても不祥事が起きていること」について知識の有無について尋ねた。回答形式は「知らない」（0点）から「知っている」（1点）までの2件法である。

④相談先の知識：相談先の知識は「アルハラなどの飲酒に関する問題が起きた場合、どこに相談すればよいか」「犯罪に関する問題が起きた場合、どこに相談すればよいか」「SNSに関する問題が起き

た場合、どこに相談すればよいか」「カンニングやレポートの剽窃に関する問題が起きた場合、どこに相談すればよいか」「デートDVなどの交際相手に関する問題が起きた場合、どこに相談すればよいか」について知識の有無について尋ねた。回答形式は「知らない」(0点)から「知っている」(1点)までの2件法である。

⑤罪悪感：石川・内山(2002)が作成した青年用罪悪感尺度の規則場面の項目を修正した10項目を用いた。なお、項目は山形大学の調査(小倉編、2014)で用いられた項目と同じものである。回答形式は、「感じない」(1点)から「非常に感じる」(4点)までの4件法である。

⑥社会的スキル：菊池(1988)が作成した社会的スキル尺度18項目を用いた。回答形式は「いつもそうではない」(1点)から「いつもそうだ」(5点)までの5件法である。

⑦大学環境への適応感：大久保・青柳(2003a)が作成した大学生用適応感尺度29項目を使用した。回答形式は「全くあてはまらない」(1点)から「非常にあてはまる」(5点)までの5件法である。

⑧授業：大久保・有馬・柳澤・山岸・野崎・松井・山下・山下・大西(2012)で用いた大学の授業全般の出席、努力、満足度を尋ねた。回答形式は出席では「出席していない」(1点)から「出席している」(5点)、努力では「努力していない」(1点)から「努力している」(5点)、満足度では「満足していない」(1点)から「満足している」(5点)までの5件法である。

⑨部活動・サークル：大久保・有馬・柳澤・山岸・野崎・松井・山下・山下・大西(2012)で用いた大学の部活動・サークルの努力、満足度を尋ねた。回答形式は努力では「努力していない」(1点)から「努力している」(5点)、満足度では「満足していない」(1点)から「満足している」(5点)までの5件法である。

⑩アルバイト：大久保・有馬・柳澤・山岸・野崎・松井・山下・山下・大西(2012)で用いたアルバイトの努力、満足度を尋ねた。回答形式は努力では「努力していない」(1点)から「努力している」(5点)、満足度では「満足していない」(1点)から「満足している」(5点)までの5件法である。

⑪ボランティア：大久保・有馬・柳澤・山岸・野崎・松井・山下・山下・大西(2012)で用いたボランティアの努力、満足度を尋ねた。回答形式は努力では「努力していない」(1点)から「努力している」(5点)、満足度では「満足していない」(1点)から「満足している」(5点)までの5件法である。

4. 結果と考察

4-1. 問題行動の経験の検討

香川大学の1年生の問題行動の経験について検討するため、問題行動の経験の有無について人数と割合を算出した(表1)。その結果、半数以上の学生が経験したことがあるのは、「未成年者でお酒を飲む」(262名、64.4%)、「お酒を飲んで自転車に乗る」(186名、45.5%)であった。他の問題行動についてはしたことがある者が10%以下であった。

以上の結果から、香川大学では飲酒関係の問題行動を経験している1年生が多いことが示された。このことから、1年生のコンプライアンス教育は特に飲酒を絡めたものを行っていく必要があるといえる。また、大学1年生ということもあり、飲酒関係以外の他の問題行動については経験していないと考えられるが、上級生になるにつれて他の問題行動に走る可能性もあるため、飲酒を入り口として、他の問題行動についても考えることのできるようなコンプライアンス教育を考えていく必要があると

いえる。

表1 問題行動の経験の割合

| | したことがない | したことがある |
|---------------------------------------|------------|------------|
| 未成年者でお酒を飲む | 145 (35.6) | 262 (64.4) |
| 他人にお酒を飲むことを強要する | 372 (90.7) | 38 (9.3) |
| お酒を飲んで自転車に乗る | 223 (54.5) | 186 (45.5) |
| お酒を飲んで自動車を運転する | 396 (96.6) | 14 (3.4) |
| 他人の傘を黙って使う | 387 (94.4) | 23 (5.6) |
| 他人の自転車を黙って使う | 406 (99.0) | 4 (1.0) |
| 店の物を万引きする | 406 (99.0) | 4 (1.0) |
| 大麻や脱法ハーブなどを使う | 409 (99.8) | 1 (0.2) |
| 他人の悪口などをツイッターやフェイスブックなどのSNS上に載せる | 380 (92.7) | 30 (7.3) |
| 自らの問題行動や犯罪行為をツイッターやフェイスブックなどのSNS上に載せる | 406 (99.3) | 3 (0.7) |
| 本やインターネットの文章を出典を示さずに引用し、レポートとして提出する | 369 (90.2) | 40 (9.8) |
| 試験の際にカンニングをする | 402 (98.0) | 8 (2.0) |
| 交際相手に対して暴力をふるう、性行為を強要するなど身体的に傷つける | 406 (99.3) | 3 (0.7) |
| 交際相手に対してひどい言葉をかけるなど精神的に傷つける | 393 (96.1) | 16 (3.9) |

注：()内は%

4-2. 問題行動の見聞の検討

香川大学1年生の問題行動の見聞について検討するため、香川大学での問題行動の見聞の有無について人数と割合を算出した(表2)。その結果、半数以上の学生が見聞きしたことがあるのは、「未成年者でお酒を飲む」(369名、90.0%)、「お酒を飲んで自転車に乗る」(288名、70.2%)、「他人にお酒を飲むことを強要する」(283名、69.0%)であった。1割以上の学生が見聞きしたことがあるのは、「他人の傘を黙って使う」(180名、43.9%)、「他人の悪口などをツイッターやフェイスブックなどのSNS上に載せる」(122名、29.8%)、「本やインターネットの文章を出典を示さずに引用し、レポートとして提出する」(120名、29.3%)、「他人の自転車を黙って使う」(116名、28.3%)、「試験の際にカンニングをする」(88名、21.5%)、「お酒を飲んで自動車を運転する」(61名、14.9%)、「自らの問題行動や犯罪行為をツイッターやフェイスブックなどのSNS上に載せる」(55名、13.4%)であった。他の問題行動については見聞きしたことがある者が10%以下であった。

以上の結果から、香川大学では問題行動の経験と同様に飲酒関係の問題行動を見聞きしている1年生が多いことが示された。約9割の学生が未成年の飲酒を見聞きしていることから、未成年の飲酒が常態化していることが示唆される。さらに、約7割の学生が飲酒を強要し、飲酒して自転車に乗るなど飲酒関係の問題行動を見聞きしており、約15%の学生が飲酒して自動車を運転していることを見聞きしていることから、大学全体での飲酒に関するコンプライアンス教育を行っていく必要があるといえる。また、傘や自転車を黙って使うことは窃盗罪になりかねない行為である。実際に香川大学で自転車泥棒を捕まえたことがあるが、平気で拾ったとうそをつき、また一連のプロセスをツイッターなどのSNSに載せるなど、後で何が起きるのかを考えられない学生も存在する。犯罪だけでなく、SNSのトラブルも含めて、SNSに関する教育も行っていく必要があるといえる。剽窃やカンニングについては、講義の中でも学んでいるはずだが、依然として存在している。

表2 問題行動の見聞の割合

| | 香川大学で見たり、 聞いたことがない | 香川大学で見たり、 聞いたことがある |
|-----------------------------------------|-----------------------|-----------------------|
| 未成年者でお酒を飲む | 41 (10.0) | 369 (90.0) |
| 他人にお酒を飲むことを強要する | 127 (31.0) | 283 (69.0) |
| お酒を飲んで自転車に乗る | 122 (29.8) | 288 (70.2) |
| お酒を飲んで自動車を運転する | 349 (85.1) | 61 (14.9) |
| 他人の傘を黙って使う | 230 (56.1) | 180 (43.9) |
| 他人の自転車を黙って使う | 294 (71.7) | 116 (28.3) |
| 店の物を万引きする | 389 (94.9) | 21 (5.1) |
| 大麻や脱法ハーブなどを使う | 409 (99.8) | 1 (0.2) |
| 他人の悪口などをツイッターやフェイスブックなどの SNS 上に載せる | 288 (70.2) | 122 (29.8) |
| 自らの問題行動や犯罪行為をツイッターやフェイスブックなどの SNS 上に載せる | 355 (86.6) | 55 (13.4) |
| 本やインターネットの文章を出典を示さずに引用し、レポートとして提出する | 290 (70.7) | 120 (29.3) |
| 試験の際にカンニングをする | 322 (78.5) | 88 (21.5) |
| 交際相手に対して暴力をふるう、性行為を強要するなど身体的に傷つける | 397 (96.8) | 13 (3.2) |
| 交際相手に対してひどい言葉をかけるなど精神的に傷つける | 385 (93.9) | 25 (6.1) |

注：() 内は%

4-3. 不祥事および相談先の知識の検討

香川大学の1年生の不祥事および相談先の知識について検討するため、不祥事および相談先の知識の有無について人数と割合を算出した(表3)。その結果、多くの学生(320名、78.4%)が「香川大学においても不祥事が起きていること」を知っていた。相談先について学生が知っているのは、「犯罪に関する問題が起きた場合」(126名、30.7%)、「デートDV等の交際相手に関する問題が起きた場合」(87名、21.3%)、「アルハラなどの飲酒に関する問題が起きた場合」(54名、13.2%)、「カンニングやレポートの剽窃に関する問題が起きた場合」(53名、13.0%)、「SNSに関する問題が起きた場合」(45名、11.0%)の順であった。

以上の結果から、大半の香川大学の1年生は不祥事が起きていることは知っているが、問題が起きた際の相談先を知らないことが示された。その中でも犯罪が起きた場合は3割程度が相談先を知っていたが、逆に言えば、7割は犯罪が起きた際に警察に相談できない可能性があるということである。自分は問題行動をしないから関係ないというのではなく、周りの人間がトラブルに巻き込まれる可能性も考慮し、問題が起きた際の相談先を学生に対して伝えていく必要があるといえる。

表3 不祥事および相談先の知識の割合

| | 知らない | 知っている |
|---------------------------------------|------------|------------|
| 香川大学においても不祥事が起きていること | 88 (21.6) | 320 (78.4) |
| アルハラなどの飲酒に関する問題が起きた場合、どこに相談すればよいか | 354 (86.8) | 54 (13.2) |
| 犯罪に関する問題が起きた場合、どこに相談すればよいか | 282 (69.1) | 126 (30.7) |
| SNSに関する問題が起きた場合、どこに相談すればよいか | 363 (89.0) | 45 (11.0) |
| カンニングやレポートの剽窃に関する問題が起きた場合、どこに相談すればよいか | 356 (87.0) | 53 (13.0) |
| デートDV等の交際相手に関する問題が起きた場合、どこに相談すればよいか | 322 (78.7) | 87 (21.3) |

注：() 内は%

4-4. 罪悪感の先行研究との比較

香川大学の1年生の罪悪感が他大学と比べて低いのかを検討するために、大学(香川大学、山形大学)

を独立変数とした t 検定を行った (表 4)。その結果、「授業中に授業と関係のないことをした」(t = 1.893、df = 176、p<.05)、「親に反抗した」(t = 3.551、df = 176、p<.01)、「親の許可なしで夜遅くまで遊んだ」(t = 5.913、df = 176、p<.01)において、香川大学のほうが山形大学よりも有意に高かった。「学則を破った」(t = 4.151、df = 176、p<.01)、「踏切が鳴っているのにわたった」(t = 7.098、df = 176、p<.01)、「バス代、電車代をごまかした」(t = 3.099、df = 176、p<.01)、「電車の中で騒いだ」(t = 1.721、df = 176、p<.05)において、山形大学のほうが香川大学よりも有意に高かった。以上の結果から、山形大学の調査 (小倉編、2014) と比較して、香川大学が高い項目と低い項目があることが示された。山形大学は1年生から4年生までが調査対象となっているため、厳密な比較ではないが、特に香川大学生の罪悪感が低いわけではないといえる。山形大学の調査では、罪悪感を規範意識としてとらえ、規範意識を不祥事の原因としていたが、調査の結果から山形大学も香川大学も規範意識としての罪悪感が高いことが明らかとなり、不祥事が続発していても学生全体の規範意識が低下しているわけではないことが示唆された。

表 4 罪悪感の平均値と t 検定の結果

| | 香川大学 | 山形大学 | t 値 |
|---------------------|--------------|--------------|---------|
| 授業中に授業と関係のないことをしていた | 2.04 (0.731) | 1.97 (0.707) | 1.893* |
| 自転車の二人乗りをした | 2.38 (0.996) | 2.34 (1.001) | 0.191 |
| 信号が赤なのに道路を横断した | 2.39 (0.875) | 2.41 (0.934) | 0.413 |
| 学則を破った | 2.57 (0.996) | 2.78 (0.967) | 4.151** |
| 踏切が鳴っているのにわたった | 2.64 (1.016) | 3.02 (1.028) | 7.098** |
| バス代、電車代をごまかした | 3.34 (0.889) | 3.48 (0.864) | 3.099** |
| 電車の中で騒いだ | 2.81 (0.862) | 2.89 (0.895) | 1.721* |
| 親に反抗した | 2.34 (0.921) | 2.17 (0.918) | 3.551** |
| 親の許可なしで夜遅くまで遊んだ | 2.19 (0.996) | 1.90 (0.934) | 5.913** |
| ゴミをゴミ箱に捨てないでポイ捨てした | 3.01 (0.957) | 3.01 (0.944) | 0.000 |

注：() 内は標準偏差。* p<.05 ** p<.01。

4-5. 社会的スキル、大学環境への適応感の先行研究との比較

香川大学の1年生の社会的スキルおよび大学環境への適応感が他大学と比べて低いのかを検討するために、大学 (香川大学、先行研究で対象となった大学) を独立変数とした t 検定を行った (表 5)。その結果、大学環境への適応感の「居心地の良さの感覚」(t = 6.583、df = 176、p<.01)、「被信頼・受容感」(t = 5.047、df = 176、p<.01)、「課題・目的の存在」(t = 5.514、df = 176、p<.01)において、香川大学のほうが大久保・青柳 (2005a) の研究で対象となった大学よりも有意に高かった。「社会的スキル」(t = 2.544、df = 176、p<.01)において、菊池 (1988) の研究で対象となった大学のほうが香川大学よりも有意に高かった。

以上の結果から、社会的スキルは先行研究のほうが高く、大学環境への適応感は香川大学のほうが高いことが示された。社会的スキルの先行研究の菊池 (1988) の調査は20年以上前のものであり、大学環境への適応感の先行研究の大久保・青柳 (2005a) も10年前の調査であるため、厳密な比較ではないが、香川大学の1年生は社会的スキルは低い、大学に適応しているといえる。ただし、非行少年の社会的スキルが低いわけではない (磯部・堀江・前田、2004) ことや反社会的行動をする者の学校への適応感が高い場合がある (大久保・青柳、2003b) ことから、社会的スキルや学校への適応感の高低は問題行動の予測因とならない可能性も考えられる。したがって、単純に香川大学の学生の

社会的スキルが低いから問題が起きているのか、学校への適応感が高いから起きているのかについては、詳細に検討して行く必要があるといえる。

表5 社会的スキルおよび大学環境への適応感の平均値と t 検定の結果

| | 香川大学 | 先行研究 | t 値 |
|-----------|----------------|---------------|---------|
| 社会的スキル | 55.33 (10.652) | 57.56 (9.272) | 2.544** |
| 大学環境への適応感 | | | |
| 居心地の良さの感覚 | 34.86 (5.914) | 31.39 (6.576) | 6.583** |
| 被信頼・受容感 | 18.81 (3.900) | 17.11 (3.975) | 5.047** |
| 課題・目的の存在 | 24.94 (4.549) | 22.72 (4.966) | 5.514** |
| 拒絶感の無さ | 21.51 (4.385) | 21.50 (3.588) | 0.028 |

注：()内は標準偏差。* $p < .05$ ** $p < .01$ 。

4-6. 問題行動の経験および見聞、相談先の知識、罪悪感、社会的スキル、大学環境への適応感の関連の検討

問題行動の経験および見聞と相談先の知識、罪悪感、社会的スキル、大学環境への適応感との関連を検討するため、ピアソンの相関係数を算出した(表6)。その結果、「問題行動の経験」は「問題行動の見聞」($r = .390, p < .01$)、大学環境への適応感の「居心地の良さの感覚」($r = .211, p < .01$)、「被信頼感・受容感」($r = .131, p < .05$)との間に有意な正の関連がみられた。「問題行動の見聞」は、大学環境への適応感の「拒絶感の無さ」($r = -.148, p < .01$)との間に有意な負の関連がみられた。「相談先の知識」は、大学環境への適応感の「課題・目的の存在」($r = .113, p < .05$)との間に有意な正の関連がみられた。「罪悪感」は、大学環境への適応感の「課題・目的の存在」($r = .136, p < .01$)との間に有意な正の関連がみられた。「社会的スキル」は、大学環境への適応感の「居心地の良さの感覚」($r = .439, p < .01$)、「被信頼・受容感」($r = .477, p < .01$)、「課題・目的の存在」($r = .369, p < .01$)、「拒絶感の無さ」($r = .360, p < .01$)との間に有意な正の関連がみられた。大学環境への適応感の「居心地の良さの感覚」は、「被信頼・受容感」($r = .667, p < .01$)、「課題・目的の存在」($r = .632, p < .01$)、「拒絶感の無さ」($r = .612, p < .01$)との間に有意な正の関連がみられた。大学環境への適応感の「被信頼・受容感」は、「課題・目的の存在」($r = .548, p < .01$)、「拒絶感の無さ」($r = .331, p < .01$)との間に有意な正の関連がみられた。大学環境への適応感の「課題・目的の存在」は、「拒絶感の無さ」($r = .481, p < .01$)との間に有意な正の関連がみられた。

以上の結果から、大学での問題行動の経験が多い者は、問題行動を見聞きすることも多く、大学で居心地が良く、信頼され受け入れられていると感じていることが示された。このことから、香川大学の問題行動の経験が多い学生は大学生活を楽しんでおり、他の学生の問題行動の情報に触れる機会が多いことが示唆される。また、問題行動を見聞きすることの多い者は、大学で拒絶感を感じていることが示された。このことから、香川大学で問題行動の情報に触れることのできる学生は周囲からの拒絶感も感じていることが示唆される。さらに、相談先を知っている者や罪悪感の強い者は大学で課題・目的があることが示された。大学でやりたいことがあるというのは自ら学んでいるということであり、援助資源を活用できているのかもしれない。また、大学でやりたいことがあれば、その課題・目的を達成するためにも悪いことをしてはいけないという気持ちになるのかもしれない。そして、先行研究と同様に社会的スキルの高い者は大学に適応していることが示された。大久保・青柳(2005b)の研究と同様に社会的スキルは大学への適応感と関連していたが、1時点のみの関連であり、社会的スキ

ルを獲得したから適応したのか、適応したから社会的スキルが獲得されたのかについては明確ではないため、今後検討を行っていく必要があるといえる。

次に、「問題行動の見聞」、「相談先の知識」、「罪悪感」、「社会的スキル」、「大学環境への適応感」が「問題行動の経験」に影響するのかを検討するために重回帰分析を行った（表7）。その結果、「問題行動の見聞」（ $\beta = .426, p < .01$ ）、「大学環境への適応感」（ $\beta = .260, p < .01$ ）から有意な正の影響がみられ、「相談先の知識」（ $\beta = -.104, p < .05$ ）、「罪悪感」（ $\beta = -.168, p < .01$ ）から有意な負の影響がみられた。以上の結果から、問題行動を見聞きすることが多く、大学に適応している者ほど問題行動を経験しており、相談先の知識を持っており、罪悪感の高い者ほど問題行動を経験していないことが示された。山形大学の調査（小倉編、2014）では、規範意識としての罪悪感と社会的スキルが不祥事の原因として考えられていたが、分析の結果、香川大学では規範意識としての罪悪感や社会的スキルよりも、問題行動の情報に触れることや大学に適応していることのほうが問題行動の要因となっていることが明らかとなった。

表6 問題行動の経験および見聞、相談先の知識、罪悪感、社会的スキル、大学環境への適応感の関連

| | II | III | IV | V | VI | VII | VIII | IX |
|-------------------------|--------|-------|-------|------|--------|--------|--------|---------|
| I 問題行動の経験 | .390** | -.060 | -.113 | .062 | .211** | .131* | .056 | .076 |
| II 問題行動の見聞 | | .074 | .017 | .034 | -.093 | -.022 | -.078 | -.148** |
| III 相談先の知識 | | | .032 | .064 | .027 | .057 | .113* | .036 |
| IV 罪悪感 | | | | .028 | .019 | .002 | .136** | .010 |
| V 社会的スキル | | | | | .439** | .477** | .369** | .360** |
| VI 大学環境への適応感 居心地の良さの感覚 | | | | | | .667** | .632** | .612** |
| VII 大学環境への適応感 被信頼・受容感 | | | | | | | .548** | .331** |
| VIII 大学環境への適応感 課題・目的の存在 | | | | | | | | .481** |
| IX 大学環境への適応感 拒絶感の無さ | | | | | | | | |

注：* $p < .05$ ** $p < .01$ 。

表7 重回帰分析結果

| | 問題行動の経験 |
|-----------|---------|
| 問題行動の見聞 | .426** |
| 相談先の知識 | -.104* |
| 罪悪感 | -.168** |
| 社会的スキル | -.059 |
| 大学環境への適応感 | .260** |
| 重相関係数 | .490** |

注：* $p < .05$ ** $p < .01$ 。

4-7. 問題行動の経験および見聞、授業、部活動・サークル、アルバイト、ボランティアの関連の検討

問題行動の経験および見聞と授業、部活動・サークル、アルバイト、ボランティアとの関連を検討するため、ピアソンの相関係数を算出した（表8）。その結果、「問題行動の経験」は、「授業への出席」（ $r = -.175, p < .01$ ）、「授業への努力」（ $r = -.228, p < .01$ ）、「授業の満足度」（ $r = -.243, p < .01$ ）、「ボランティアへの努力」（ $r = -.261, p < .05$ ）との間に有意な負の関連がみられた。「問題行動の見聞」は、「授業への努力」（ $r = -.159, p < .01$ ）、「授業の満足度」（ $r = -.182, p < .01$ ）との間に有意な負の関連がみられた。「授業への出席」は、「授業への努力」（ $r = .389, p < .01$ ）、「授業の満足度」（ $r = .389, p < .01$ ）との間に有意な正の関連がみられた。

= .115、 $p < .05$ ）、「部活動・サークルへの努力」($r = .136$ 、 $p < .05$)との間に有意な正の関連がみられた。「授業への努力」は、「授業の満足度」($r = .399$ 、 $p < .01$)、「部活動・サークルへの努力」($r = .143$ 、 $p < .01$)、「アルバイトへの努力」($r = .156$ 、 $p < .01$)、「アルバイトの満足度」($r = .206$ 、 $p < .01$)、「ボランティアへの努力」($r = .277$ 、 $p < .05$)との間に有意な正の関連がみられた。「授業の満足度」は、「部活動・サークルへの努力」($r = .207$ 、 $p < .01$)、「部活動・サークルの満足度」($r = .322$ 、 $p < .01$)、「アルバイトへの努力」($r = .219$ 、 $p < .01$)、「アルバイトの満足度」($r = .275$ 、 $p < .01$)との間に有意な正の関連がみられた。「部活動・サークルへの努力」は、「部活動・サークルの満足度」($r = .568$ 、 $p < .01$)、「アルバイトの満足度」($r = .144$ 、 $p < .05$)、「ボランティアへの努力」($r = .345$ 、 $p < .05$)、「ボランティアの満足度」($r = .311$ 、 $p < .05$)との間に有意な正の関連がみられた。「部活動・サークルの満足度」は、「アルバイトの満足度」($r = .225$ 、 $p < .01$)との間に有意な正の関連がみられた。「アルバイトへの努力」は、「アルバイトの満足度」($r = .392$ 、 $p < .01$)との間に有意な正の関連がみられた。「アルバイトの満足度」は、「ボランティアへの努力」($r = .311$ 、 $p < .05$)との間に有意な正の関連がみられた。「ボランティアへの努力」は、「ボランティアの満足度」($r = .619$ 、 $p < .01$)との間に有意な正の関連がみられた。

以上の結果から、大学での問題行動の多い者は授業に出ておらず、授業で努力せず、授業に満足しておらず、ボランティアでも努力していないことが示された。また、問題行動を見聞きすることの多い者は、授業で努力せず、授業に満足していないことが示された。このことから、大学での授業への取り組みは問題行動の抑止と関係していることが示唆される。そもそも授業に出てこない学生に主題A「人生とキャリア」の取り組みは伝わらないことから、授業の中だけでコンプライアンス教育を行うのではなく、様々な機会でもコンプライアンス教育を行って行く必要があるといえる。

表8 問題行動の経験および見聞、授業、部活動・サークル、アルバイト、ボランティアの関連

| | II | III | IV | V | VI | VII | VIII | IX | X | XI |
|------------------|--------|---------|---------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| I 問題行動の経験 | .390** | -.175** | -.228** | -.243** | .005 | .045 | .038 | .001 | -.261* | -.078 |
| II 問題行動の見聞 | | -.056 | -.159** | -.182** | -.050 | -.076 | .014 | .040 | -.071 | -.087 |
| III 授業への出席 | | | .389** | .115* | .136* | -.004 | .089 | .124* | .090 | .049 |
| IV 授業への努力 | | | | .399** | .143** | .085 | .156** | .206** | .277* | -.019 |
| V 授業への満足度 | | | | | .207** | .322** | .219** | .275** | .175 | .220 |
| VI 部活動・サークルへの努力 | | | | | | .568** | .063 | .144* | .345* | .311* |
| VII 部活動・サークルの満足度 | | | | | | | .109 | .225** | .184 | .132 |
| VIII アルバイトへの努力 | | | | | | | | .392** | .118 | -.053 |
| IX アルバイトの満足度 | | | | | | | | | .311* | -.151 |
| X ボランティアへの努力 | | | | | | | | | | .619** |
| XI ボランティアの満足度 | | | | | | | | | | |

注：* $p < .05$ ** $p < .01$ 。

5. おわりに

本研究では、香川大学1年生を対象として、問題行動の実態について検討を行った。具体的には、まず、香川大学1年生の問題行動の経験と香川大学での問題行動の見聞について検討した。その結果、飲酒関連の問題行動についての経験が多く、香川大学内でも飲酒関連の問題行動について見聞きする

ことが多いことが明らかとなった。次に、香川大学1年生の不祥事および相談先の知識について検討した。その結果、多くの学生が香川大学でこれまでに不祥事が起きていることは知っているが、問題が起きた際の相談先を知らないことが明らかとなった。そして、香川大学1年生の罪悪感、社会的スキル、大学環境への適応感が先行研究と異なるのかについて比較検討した。その結果、罪悪感は香川大学の学生が低いわけではなく、香川大学の学生の社会的スキルは20年以上前の先行研究と比較して低くなっているが、大学への適応感は10年前の先行研究と比較して高くなっていることが明らかとなった。最後に、香川大学1年生の問題行動の経験および見聞が相談先の知識、罪悪感、社会的スキル、大学環境への適応感、授業、部活動・サークル、アルバイト、ボランティアとどのように関連するのかについて検討した。その結果、大学での問題行動の経験が多い者は、問題行動を見聞きすることも多く、居心地が良いなど大学に適応しているが、授業への取り組みに問題があることが明らかとなった。また、山形大学の調査（小倉編、2014）では、規範意識としての罪悪感と社会的スキルが不祥事の原因として考えられていたが、分析の結果、香川大学では規範意識としての罪悪感や社会的スキルよりも、問題行動の情報に触れることや大学に適応しているかのほうが問題行動の要因となっていることが明らかとなった。

これらの結果をもとに、香川大学におけるコンプライアンス教育について考察すると、大きく次の三点が指摘できる。第一に、コンプライアンス教育の目的として規範意識の向上を掲げることの限界である。香川大学1年生を対象に実施した本調査からは、規範意識としての罪悪感や社会的スキルよりも、問題行動の情報に触れることや大学に適応していることのほうが問題行動の要因となっていることが明らかとなった。大久保（2011）が指摘するように、規範意識や社会的スキルの低下などの子どもや若者の社会性の低下言説は調査結果では低くないことが示されても強固な信念となってしまう。実際、山形大学の調査報告（小倉編、2014）では規範意識としての罪悪感と社会的スキルが高いにもかかわらず、不祥事続発の原因として考えられていた。研究機関として、言説に振り回されずに実証データに基づいて、不祥事対策を考えていく必要があるといえる。

第二に、授業以外の場をコンプライアンス教育の場として想定する必要性が指摘できる。大学での問題行動の多い者は授業に出ておらず、授業で努力せず、授業に満足していない。そのため、授業以外の場でのコンプライアンス教育について検討する必要がある。他方、問題行動の多い者の特徴として、問題行動を見聞きすることが多く、大学に適応していることも明らかになった。問題行動の経験が多い者は他人の問題行動を見聞きすることが多いという結果は、周囲の人間関係の問題として解釈できる。大学環境に適応し、大学生活を楽しむことは学生にとって重要なことであるが、問題行動を起こさない形で大学生活を楽しむような雰囲気作りや問題行動を止められるような人間関係作りが必要になる。授業という場を活用するのであれば、問題行動と関わりのない学生を対象にそうした雰囲気作りや人間関係作りの重要性について理解させる機会にした方が有用だろう。

第三に、相談窓口の存在を学生に周知する必要性が指摘できる。大半の香川大学1年生は香川大学において不祥事が起きていることは知っているが、問題が起きた際の相談先を知らなかった。すでに大学内にはいくつかの相談窓口が設置されているが、それらの取り組みが十分に機能していないとも考えられる。全学集会での注意喚起はマスコミ対策にはなるかもしれない。しかし、その効果は未知数である。それよりも問題を未然に防ぎ、深刻化させないための相談窓口を学生に対して広く周知させる必要があるのではなかろうか。学生を加害者にも被害者にもさせないために大学ができることは、

何も新規の取り組みばかりではない。既存の支援、教育を充実させることに答えの一つがあるのかもしれない。

以上、本研究の調査結果をもとに香川大学におけるコンプライアンス教育の在り方について考察した。最後に、コンプライアンス教育に直結する内容ではないが、本研究の調査結果から得られた知見を整理しておきたい。香川大学における不祥事の多発は、学生の異常さに起因するものではなく、偶然続いたものとして捉える方が適切である。先述のとおり、香川大学生の罪悪感が低いわけではなく、大学への適応感も10年前の先行研究（大久保・青柳、2005a）と比較して高い。「香川大学の異常さ」はあくまでマスコミ報道によるものであり、実態を伴うものではないことが示唆された。山形大学の調査の結論と同様に、不祥事の多発に明確な原因はなく、たまたま続いたと考える方が現実的であろう。加えて、マスコミにより、これまでなら報道されなかった事件が表沙汰になったという可能性も考えられる。もちろん報道がきっかけとなり、事件が隠ぺいされずに表沙汰になったと考えるならば、きちんと把握し分析した上で対応することが可能になるという良い影響もある。ただし、香川大学が異常であるかのような実態とは異なる報道などにはきちんと大学として抗議することも重要であろう。

今後の課題としては、まず、調査協力者を増やす必要がある。本研究では、理系の学部の調査協力者が少なく、学部によって協力者の数に偏りがあった。学部によって意識が異なる可能性もあることから、学部ごとに調査協力者を増やし、学部による問題行動やそれに関わる要因の特徴についても検討する必要があるだろう。こうした検討を行うことは、大学生の問題行動を学部ごとにどのように理解し、支援や援助すればよいかについての一つの指針になると考えられる。

参考文献

- 藤本佳奈（2015）「市民としての倫理教育に関する授業モデルの開発」『香川大学教育研究』第12号、105－116頁。
- 藤澤文（2013）「大学生の規範意識、道徳的認知、行動基準の関連」『鎌倉女子大学紀要』第20号、11－19頁。
- 平野裕子・新井恵・山本英子・井上和久（2014）「保健医療福祉系大学学生における規範意識：看護学科の特徴」『埼玉県立大学紀要』第16巻、37－46頁。
- 石川隆行・内山伊知郎（2002）「青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連」『発達心理学研究』第13巻、12－19頁。
- 磯部美良・堀江健太郎・前田健一（2004）「非行少年と一般少年における社会的スキルと親和動機の関係」『カウンセリング研究』第37巻、15－22頁。
- 菊池章夫（1988）『思いやりを科学する』川島書店。
- 黒澤岳博・井上和久・平野裕子・山本英子・新井恵（2015）「大学生の規範意識：青少年育成の観点から」『城西大学経営紀要』第11号、153－160頁。
- 牧亮太・宮木景子・湯澤正通（2010）「大学生の約束意識と規範的態度」『広島大学心理学研究』第10号、81－88頁。
- 松原英世（2014）「大学生の規範意識について」『愛媛法学会雑誌』第40巻、77－86頁。
- 盛岡清美・塩原勉・本間康平編（1993）『新社会学辞典』有斐閣。

- 小倉泰憲編 (2014) 『大学生の規範意識と社会性の発達：山形大学学生不祥事防止検討プロジェクトの取り組みから』山形大学出版会。
- 大久保智生 (2011) 「現代の子どもや若者は社会性が欠如しているのか：コミュニケーション能力と規範意識の低下言説からみる社会」大久保智生・牧郁子編『実践をふりかえるための教育心理学：教育心理にまつわる言説を疑う』ナカニシヤ出版、113 - 128 頁。
- 大久保智生・青柳肇 (2003a) 「大学生用適応感尺度作成の試み：個人—環境の適合性の視点から」『パーソナリティ研究』第12巻、38 - 39 頁。
- 大久保智生・青柳肇 (2003b) 「中学生の問題行動と学校および家庭環境への適応感との関連：個人—環境の適合性の視点から」『日本福祉教育専門学校研究紀要』第12巻、9 - 15 頁。
- 大久保智生・青柳肇 (2005a) 「大学1年生における大学環境への適応感の変化の検討：大学生用適応感尺度の作成の試み(2)」『ソーシャルモチベーション研究』第3巻、30 - 36 頁。
- 大久保智生・青柳肇 (2005b) 「大学新入生の適応に関する研究：社会的スキルは後の適応を予測するのか？」『人間科学研究』第18巻第2号、207 - 213 頁。
- 大久保智生・有馬道久・柳澤良明・山岸知幸・野崎武司・松井剛太・山下隆章・山下真弓・大西えい子 (2012) 「教員養成学部4年生へのアンケート調査による教員養成カリキュラムの検討：2010年の教員採用試験の可否と教員志望の有無に関する分析から」『日本教育大学協会研究年報』第30集、133 - 147 頁。
- 高橋征仁 (2003) 「コールバーグ理論と道徳意識研究：規範意識における相対化と逸脱行動」『社会学研究』第74号、27 - 58 頁。
- 植田和也・藤本佳奈 (2015) 「大学生における規範意識の醸成に関する取り組み：マナー・モラル・ルールについて考える授業を通して」『香川大学教育実践総合研究』第30巻、15 - 27 頁。
- 山岸明子 (2002) 「現代青年の規範意識の希薄性の発達の意味」『順天堂大学医療短期大学紀要』13、49 - 58 頁。
- 山本英子・井上和久・新井恵・平野裕子・黒澤岳博 (2013) 「保健医療福祉系大学学生における規範意識」『埼玉県立大学紀要』第15巻、53 - 64 頁。
- Young, J., 1999, *The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*. Sage Publication. (= 2007, 青木秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂訳『排除型社会：後期近代における犯罪・雇用・差異』洛北出版).